常滑市民俗資料館

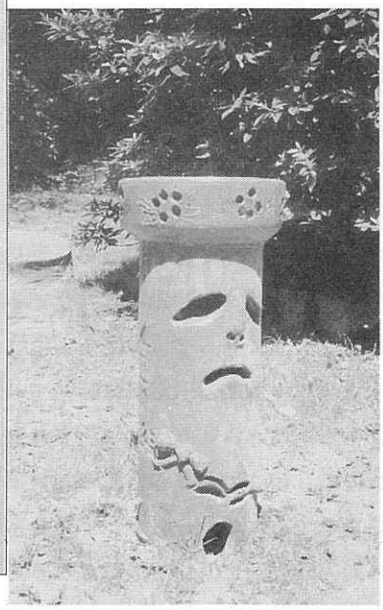
友の会だより

第16号

土管の歴史展サポート・事前の紹介　と
トラベルレポート・特集号

「友千鳥」（1750年頃）の写本「知多遊記」に掲載された
常滑焼風景の挿絵

常滑にてかめをやく。皆手かけんにて
其形を作る



常石神社境内にある土管のオブジェ

平成6年9月発行（1994）

「土管の歴史」展に寄せて

柿　田　富　造

1．はじめに

この度常滑市は、市制40周年を記念して「土管の歴史」展―飛鳥から現代まで―を、この民俗資料館で10月25日㈫より11月30日㈬にわたって開催することになりました。常滑市はこの春には中世六古窯サミットを、夏には国際焼き物フェスティバルを、秋には「土管の町」常滑にふさわしい「土管の歴史」展をイベントとして取り上げ、大いに常滑をアッピールしようとしています。そうした市の肝入りにより「土管の歴史」展は、民俗資料館はじまって以来の最大規模の企画展になる予定ですし、全国でも土管に関する展示は珍しいということで、今のところ前人気も上々といったところです。

ところがこの企画展を最初に提案したのは、もともと「友の会」ですから、この企画展を是非とも成功させるために、会員皆さま方の絶大なるお力添えをお願いしたいと思います。

2．「土管の歴史」展の見どころ

従来の土管の歴史書は、その大部分は19世紀中頃から始まっていますが、この数年来の調査の結果、土管は既に７世紀からわが国で造られていることが分かってきました。従いまして土管の歴史については、最初から見直しをする時期に迫られていると認識しておりますが、そうした認識の上に立って、今回全国各地の各時代の土管が「土管の町」常滑に集結できますことは、常滑市にとっても市民にとっても、大きな喜びであり誇りでもあると思っています。それでは見学するに当たって展示される土管の見どころを、時代別に分けて述べてみることにしましょう。

２－１　古代の土管

６世紀に朝鮮半島の百済からわが国へ仏教が伝来しますと、飛鳥地方に瓦葺屋根の寺院や宮殿が相次いで建造されました。その屋根瓦は飛鳥地方で焼かれたものですが、土管もまた同じ窯で焼かれました。屋根に葺かれた丸瓦は成形の際、土管の形状の素地を縦方向に半截したものだったので、丸瓦も土管ももともとは同じものであったということが言えます。このような土管は７～８世紀にわたって、飛鳥・奈良地方へ普及していきました。

２－２　中世の土管

中世になると奈良の周辺でソケット付土管が使われるようになりました。その成形法は紐つくり成形とタタラ成形の２方法があって、従来の叩き成形より効率化されるようになりました。この成形法は明治時代にも行われた方法です。

２－３　近世の土管

江戸時代には全国に約50箇所程の上水道が施工されましたが、その内土管が使用されたのはわずかに10箇所程度でした。しかしどうした訳かソケット付土管はその内のほんの一部しか使われませんでした。

一方常滑では江戸時代後期になって、水門と呼ばれたソケット付土管が、紐つくり成形で造られるようになりました。それらはこの地方の溜池の井（いり）などに使われたようですが、まだその実態はよく分かっておりません。

２－４　近代の土管

明治維新に西洋から近代土管が導入されました。ソケット部が角張って前後の土管と結

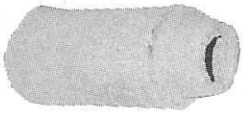
合しやすくなった形状ですが、この土管の国産化に成功したのは常滑の鯉江方寿でした。方寿は登窯の改良や木型の採用をはじめ、幾多の改善を積み重ねて苦労の末ようやく完成させたものです。この常滑の真焼土管の品質は全国津々浦々に知れ渡り、鉄道工事用・上下水道用などに広く採用されるようになりました。

今回は特に東京品川の仙台坂および旧新橋駅周辺部から発掘された常滑の製造者銘のある真焼土管も数点展示することにしました。

２－５　その他の展示品

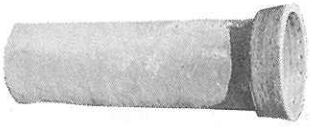
まだその他にも大正・昭和の陶管および現在製造されているセラミックパイプなども展示する予定でいますし、更に井戸筒の歴史や電纜管・特殊陶管についても触れる予定でいます。

古代　異口径土管



古代　玉縁付土管

中世　ソケット付土管



近代土管

３．講話室の展示品

また２階の講話室には、「土管の歴史」展とは別に「友の会」が主催して、土管に関係した資料を展示するコーナーを設けます。世界の土管レプリカやパイプ状の陶磁器などを古文書類と一緒に展示しますので、充分楽しんでいただけると思います。どうぞご期待下さいますように。

柳生の里・円成寺・浄瑠璃寺

増　田　静　子

５月12日、昨夜来の小雨が残る中を出発。西へ向かう車中、時折り降る雨に心配したが、静かな山里の柳生に着いたら雨は上がっていた。

土地の郷土史研究家の奥田さんの御案内で先ず正木坂道場へ向かう。石を並べた坂道は雨に濡れて滑り易い。道場は柳生十兵衛の道場で多勢の兵法者が参集し栄えたが幕府と共に亡び、昭和42年芳徳禅寺の橋本定芳師の尽力により再建された。京都所司代の玄関を移築したといわれどっしりした建物。今も多くの剣道修行者が集まり競技会も行われるとの事。

そこから新緑の間を少し行くと芳徳禅寺があり山門の手前下に石舟斎塁城跡の石碑がある。20段程の石段を上って山門を入る寺は柳生家の菩提寺で、但馬守宗矩が父石舟斎宗厳の供養の為に建てたもの。開山は宗矩と親しかった沢庵和尚。今本堂は修理中で庫裡の方に釈迦如来坐像が祀られ、隣に宗矩像・沢庵和尚像が安置されている。両側のケースの中には柳生家に伝えられた新陰流兵法文献や道具等展示されている。この寺は明治年間に無住となり荒れていたが、尾張柳生の後裔の人が多額の寄進をして回復し

たそうだ。寺の裏の墓所には宗矩の墓を中心に代々のお墓が大小80基整然と並んでいる。八代藩主の次男乏斎の徳利の塔に盃の笠というのもある。時折り鶯の囀りも聞かれる山の中、お参りを終える。

次は蛙の声を聞き乍ら旧柳生藩家老屋敷へ、屋敷は石垣が積まれ少し高くなっている。この石垣は尾張の石工が築いたといわれ一番上の石に野間と名前が刻まれている。

ここの主、小山田主鈴は文政9年（1826）45才で国家老として奈良に入り、大阪の米相場で巨利を得て藩財政を立て直したとの事。各部屋に鎧や道具等が飾られている。廃藩後も子孫が屋敷に住んでいたが、昭和36年に奈良へ引越し昭和39年に作家山岡荘八氏の所有となる。大作「徳川家康」もここで完成され、大河ドラマ「春の坂道」もここで生まれた。昭和55年奈良市へ寄贈された。

〽山深き柳生の里の午さがり
　小田に蛙（かはず）のしきり鳴き交う　花子
〽真みどりに直（す）ぐ立つ若き竹の肌
　仰げばまぶし柳生の里に　早知子

山菜料理の昼食の後、忍辱山円成寺（にんにくせんえんじょうじ）に向かう。応仁の乱（1467）で主要な建物が焼かれその後再興して、江戸時代には広大な寺領を持つ大寺となったが明治維新後衰えた。

楼門、本堂ともに国の重要文化財に指定されている。本堂に入ると中央に阿弥陀如来坐像、そのまわりに四天王像、それを囲む四本柱には聖衆来迎図の菩薩が色も奇麗に描かれてある。82才という和尚様が飄々とお話をして下さる。

旧本尊の十一面観音立像、僧形文殊坐像、大日如来坐像（国宝）等重文県文と文化財が多い。又本堂東にある小さい社、春日堂、白山堂は春日造り最古の社殿として国宝となっている。

楼門前にある木々に囲まれた池は、平安時代の典型的な浄土庭園で、平泉の毛越寺と共に国の名勝に指定されている。

次に柳生街道を西に向かい京都府に入り浄瑠璃寺に着く、参道を行くと馬酔木（あしび）がずっと植えられている先に小さい山門があり心安らぐ。

本堂に入り和尚様のお話を聞く。この寺は九体の阿弥陀仏が横一列に安置されているので九体寺ともいわれる。平安時代の末法思想の時代に作られ、九つあるという浄土への道の各々に阿弥陀仏を配したもので、先ず東におられる薬師如来に過去世から救われ、苦悩をこえて進む為に薬を与えられ送り出して貰い、南を向いておられる釈迦如来に現世の教えを受け、西の阿弥陀如来に迎えられて浄土へ赴くことになる由。

九体の内中尊仏は来迎印（右手は上に左手は下に前に向ける）他の8体はやや小さく定印

円城寺の庭園をバックにして参加者一同

（胡坐の上中央にて指を丸め突き合わす）を結ぶ。中尊仏の脇に小振りの子安地蔵、反対側に５月20日迄御開帳されている幸福の女神吉祥天女像、厨子の内側の絵と共に彩色も奇麗な立像でふくよかなお顔。仏様はやさしいお顔で迎えて下さり有難く手を合わせる。

ここも国宝重文が多い。本堂の前の池の向う正面にある三重の塔に薬師如来が祀られていて、春秋のお彼岸中日には薬師堂から陽が昇り、真すぐに本堂の中尊仏に陽が当って、夕方には本堂の真中に沈むそうだ。

有難いお話に感じ入り、思い出を胸にお土産を手に帰路につく。

〽椎若葉　ひかる仏や　九体寺　静子

吉野ケ里遺跡と佐賀の焼きものを訪ねて

衣　川　俊　平

今回の九州佐賀への旅は、体験学習をも兼ねて初めて経験すべく高速特急トイレ付き夜行寝台バスに決め、３月15日午後８時名古屋のバスセンターを出発「参考の為に車内放送を要約」ドライバーは途中交代の為バスを停車させるがお客さまは目的地に着くまで下車不出来。10時から朝の６時まで消灯、トイレは消灯中でも使用ＯＫ但し静粛に、ＡＭ、ＦＭ等はイヤホンで自由選択、コーヒー等飲み物は、セルフＳで。

乗車前に頂いたアルコールに助けられ気持ち良くウトウト、突然ゴウーと凄い騒音に夢破らる間断なく点滅する橙色の安全灯が後ろへ飛ぶ。関門海峡地下トンネルと気付く朝の３時30分、６分間で抜け愈々九州路に入り同６時、金立サービスエリヤに着き此処で初めて車外に立ち朝の新鮮な空気を胸一杯に吸い込む。その後定刻の７時20分目的地有田に着き無事下車。

私達の巡回計画は、唐津＝吉野ケ里＝武雄＝伊万里＝有田と、決めていたので私鉄やバスを乗り継ぎ先ずは唐津市の観光案内所へ、ここで今日一日の行動計画を説明し午後５時迄の７時間使用契約で観光タクシーを調達し行動開始。

唐津焼きの起源には諸説ありしも室町、桃山時代には庶民の生活様式に添った雑陶器類が中心に焼かれていたらしいが、豊臣秀吉の朝鮮出兵によって多数の陶工達が渡来し、また時を同じうして秀吉軍の後備役として唐津城に１年半も滞在した美濃出身の古田織部や城主の寺沢志摩守も美濃出身であり共に茶人として秀吉の寵愛めでしかりし事もあって唐津焼きの文化的近

現在も発掘されつつある吉野ケ里遺跡

代化のため渡来した陶工達とともに美濃焼きの手法を指導したと案内パンフからも読み取れる。

唐津観光のスタートは先ず唐津城。犬山城を一回り大きくした程度の規模なるも、外国からの侵入を防ぐ為の備えからか、湾内や点在する島々が一望でき、且つ険しい山の頂上に建ち本州の平地に建つ城とは趣を異にすると見る。

唐津の窯元は二十数軒在ると知るが時間の関係もあり二ケ所を選定。＝井上東也の鏡山窯と、＝中里太郎右衛門の御茶碗窯夫々の窯元ともに唐津特有の味を持ち、伝統を守る気概がひしひしと伝わってくる。絵唐津、斑唐津、朝鮮唐津、織部唐津、黒唐津、刷毛目唐津、等々飽きる事無し時間がほしい。

私は記念にと朝鮮唐津のぐい呑、一つ調達。

〈寂しく悲しかった事〉

貴方達何処からお見えですかと逆質問されたので愛知の常滑から来ましたと答えたら、あゝあの土管と植木鉢を作っている所ですね。

〈九州での常滑の評価、ＰＲの歯痒さ痛感〉

唐津を後に吉野ケ里遺跡に向かう道すがら神話の里、鏡山に登り神功皇后碑を見学、東の松島、東海の三保と並ぶ日本三大の松原、西は佐賀の虹の松原（幅１㎞長さ５㎞）数万本の黒松が生える広大な松林が眼下一望に、遠くに唐津の城浮かび上がり一幅の名画の如し、少憩して車は約30㎞離れた吉野ケ里遺跡に向かう。

吉野ケ里遺跡は今から1800年程前の弥生時代後期の環濠集落跡で墳丘墓や甕棺集列跡や建物跡或いは当然ながら当時の遺物の数々が発掘されている遺跡で皆さんご存じの通りです。

二重環濠の範囲は以外に広く現在もなお発掘作業が続けられています。遺跡現場ではシャッターを切りつつ足早に廻りましたが、展示室では時間の許す限りゆっくりと参観しました。

殊に甕棺（素焼の陶製カメ）は想像以上に大きく1800年も以前にどんな窯で焼いたのか。穴窯か平窯か或いは既に登り窯的な窯場が有ったのか。このお甕を二つ合わせて寝棺に用い中に人骨が収まっていました。バッチを付けた係の人に尋ねたが、何処で焼いたのか他国からの搬入品か判っていないとの事でした。遺物は種類も多く飽きること無く足が前に進まない。流石に国の特別指定遺跡の価値充分の想いです。同行の先輩は日程を一日延ばそうかと相談あり。

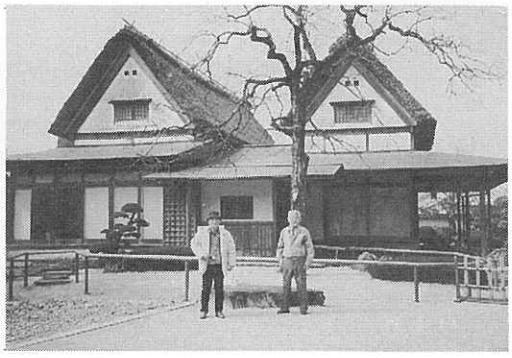
午後３時過ぎ遺跡をあとに車を飛ばし武雄で有名な江口小山田窯に着く。市街を離れた山中にある窯で当主の江口さんは、全国でこの人以外には作れない和紙を使っての色文様絵付けの名手なり。大胆と繊細が同居して手書きや型では色付け出来ない作品の数々を拝見しました。

第１日目の行動はこれで恙なく終わり武雄温泉にある指定の宿に入り、タクシーにさよなら。

〈ここで戯れ言をひとこと〉

わたしは個人で旅に出掛ける時には何時も常滑の焼き物を２つ３つ持って行く事にしている。今回もこの例に違わず３個持参し、部屋付きのお女中と板長さんにご祝儀がわりに進呈した。

この効果かどうかは知らないがお女中さんからこの土地の色々なお話を聞きながら地酒の味も手伝ってついついお銚子は10本空になる。翌朝フロントでの精算勘定でお酒は４本と記載つまり最初に頼んだ二人で２本づつ計４本のみの



酒井田柿右ヱ門の生家 庭に有名な大きな柿の木あり

計算。追加の６本は常滑焼きのお返しか。帰りの玄関には若女将が見送りにきて丁重に昨夜のお礼言葉あり、旅とは楽しき事哉。

２日目は武雄からバスで約１時間の伊万里に着く。観光案内所で窯元見学の予備知識を求む。

現在生産されている伊万里の磁器は総称して伊万里焼と言われているが、明治４年迄は所謂、民需と官需とに分かれ民需品は有田焼きを含めて一般家庭用や輸出品として多数生産され殊に輸出はアジアのみならずヨーロッパの各国に輸出されこれらはオールドイマリとしてその国々の上流家庭や王宮貴族に珍重されていたとか。

一方官需は鍋島藩が独占的に生産し陶工の流出や機密保持のため関所までつくって生産し天皇家を始め幕府への貢物や。各藩の注文に応じて生産し藩の財政を賄っていたらしい。格式を重んじてか一般の家庭向き製品は一切作らず。

市街から離れた大川内山地域には窯元が十数軒点在しているがその内の一つに鍋島藩の伝統を今も尚守り続けている窯元の在るのを知る。

私達は何の躊躇もなく、車を鍋島窯に飛ばす。関所跡を潜り山肌に点在する多数の登り窯の跡昔の倉庫らしい建物や侍の住んだ屋敷跡等を通り抜け、鍋島藩の紋所を幟に掲げる川副青山窯に着く。早速当家会長の青山さん（85歳程）に会い鍋島焼きの特徴を尋ねる。

ここ大川内山中より掘出す天然青磁石は翡翠の如く光りを込めた青色を出すがこれは鍋島藩が一手に管理統制して明治４年迄は有田焼等々の磁器絵付けの使用一切厳禁との事でした。

350年前の作品から現天皇さまお買い上げ品に至る迄の年代別作品を特別に拝見させて頂き感銘の至りこの上無し。

折角の記念にと色々物色しましたが欲しいと思う物は総べて高価で高嶺の花、已むを得ず分相応に、天狗面と鬼の面を型どった二つのグイ呑みで辛抱しての記念土産になりました。

所謂、伊万里焼の見学は窯元巡回をやめて、伊万里会館で参観した程度で伊万里を去る。

午後は伊万里駅からの私鉄で最後の目的地有田に到着。タクシーは４時間契約で巡回コースは＝李参平の墓＝古い天狗登り窯跡＝深川青磁工場＝柿右ヱ門住居跡＝柿右ヱ門窯＝古琳庵窯＝と定め、疲れてきたけどヨーイドン。

李参平の墓（日本名、金ケ江参兵衛）

日本名は金ケ江参兵衛（本名は李参平）秀吉が朝鮮から連れて来た陶工の司。最初に登り窯を築いた人。墓は古く花と線香の煙り絶えず裏に由緒書きあり、合掌しシャッターを切り去る。

天狗登り窯跡は李参平墓の近くの山の斜面にあり、間口２間程度、奥行き５間程で山の傾斜に沿い４から５段の階段状の土盛りの跡有り。ここも写真だけで次の深川青磁工場へ向かう。

ここは我が友の会会員八井さんのご紹介のお陰でご丁重な接触を受け、最初から二階の特別展示室に案内されました。

明治、大正、昭和の各天皇が好んでご使用の青磁食器類や各皇族方よりの特別注文品。外国公館への納入品。更に先日の皇太子と雅子さんの宮中にての披露晩餐会で使用された大小様々なお皿類を拝見。貴賓室では雅子さんの座った椅子に掛けさせて頂きホンワカでした。

案内して頂いた幹部の方々に感謝し辞す。

柿右ヱ門住居跡は昔の儘のたたずまいで二棟。

一つは倉庫と作業場のようで間口約30間程度奥行は7～8間程度の建物で製品乾燥用の前庭が広く利用出来るように建ててある。居住棟は二階建が二棟ありこの前の庭にかの有名な古い大きな柿の木が一本今も枯れずに立っている。

この木に実った柿の色を見てこの色を磁器に生かそうと一生懸命努力した話は有名な逸話。少し離れて建つ柿右ヱ門窯には付属展示室があり、初代の酒井田柿右ヱ門の作品を始め現在に至る代々の柿右ヱ門の作品が陳列されていて、その時代時代の生地の変化や色の変化絵模様の変化がよく理解できました。

窯元巡りの最後は古琳庵窯。この窯元は余り宣伝されていませんが玄人好みの作品が多いとの事で尋ねて見ることにした。現代は三代目の方で館林宏久さんと言いますが、有田焼の神髄は白磁に日本の和服を着せるに尽きると言う。

お茶を御馳走になりながら、常滑の方達ですか近頃は常滑焼きもいいものが出来るようになりましたね。お茶碗は特に好きですよ。

この言葉に絆されて有田のグイ呑み一つ調達。

此処までで今回の佐賀での予定巡回は終了。

名古屋帰りのバスの時間には多少間があるので近所の骨董屋を覗く事にしてタクシーを捨てる。2軒探した骨董屋では特にめぼしいもの無し。帰りの時間に余裕あり、2日間のメモ整理の為食事も兼ねて焼き鳥屋に潜り込む。

最後に余談で恐縮ですが、面白い話を一つ。

カチカラスの話、このカラスはカササギ科に属す鳥で主として朝鮮半島に多く住む。鳴き声はカチカチと鳴き、カアーカアーとは鳴かない。秀吉が朝鮮での戦いに勝ち勝ち（カチカチ）の縁起を担ぎ、李参平らと共に日本に持ちかえり唐津の山に放ったもので、今では佐賀県の天然記念物に指定されている鳥です。

形はカラスに似ているが多少小型、背は黒くて腹は白、翼は表裏白黒模様。私達は飛んでいるのは二度みましたが鳴き声は聞きませんでした。

お終いにお礼を一言。

今回の旅には、友の会の八井さんのご助言や愛南ツーリストの関係各位の綿密なスケジュールに助けられ、且つ同行の井上さんに多大なお世話になりました。

厚くお礼を申し上げます。

中国長沙の旅

岩橋佐次

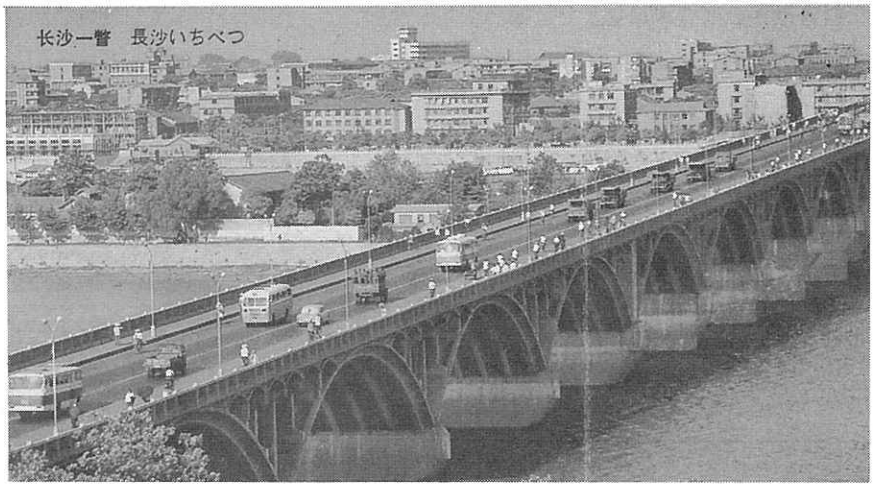
戦友と行く中国の旅40名は武漢空港についてから夫々のコース別に別れた。長沙方面行きは私と福島県の 八幡氏と二人だけで汽車を利用し武昌発18時桂林行きで出発した。

車中では20時頃車掌が食堂へ案内に来た。私等二人と他に中国人が五人いただけで、食事は五品料理でビールは好きなだけ出して下さる。二人で話が無くなる頃隣の客で日本語を習っている青年が遊びに来て前の客と席を交替して、色々話し掛けてくる。テキストを取りに行き日本のこと、又私共が中国の様子などを話し合い、日本語を教えたりして車内は退屈しなくてすんだ。

23時長沙駅に着くと中国人の通訳がホームで出迎えてくれ、ホテルに案内して呉れた。市内随一の17階建芙蓉飯店15階の部屋に入る。何もかも至れり尽くせりである。

翌8時にホテルを出発、湘江大橋へ向かう朝

のラッシュ時で人・自転車の往来がはげしい、1,260米の橋は立派だった。川の中に長大な中州が出来ており、此の町を「長沙」と言う名がこれより付けられしと伝う、今ではきれいな公園になっている。西を望めば岳麓山がすぐ前に見え中腹の「愛晩亭」なる名所に案内された。



頂上の麓山寺は時間の関係で行かず、途中より長沙市街を展望し記念写真を撮る。日本と違った風景が展開して本当に美しい。追われる様に次の目的地湘南省博物館へ。今迄来た道を戻り橋を渡り市内に入る。ここでは二千年ばかり前の「馬王堆」のミイラを見学するのが目的であった。先ず旧館を一巡する。

新館に入ると一階には発掘時の説明あり。「馬王堆」は1971年末に医院建設工事中に発見され、72年から発掘に掛り三つの墓が74年迄に全部終った。紀元前160年頃の墓である。

一号墓は夫人の墓、二号墓は長沙軑侯の墓、三号墓は次男の墓で二号三号は盗掘され骨のみだったそうである。副葬品がガラスのケースに入れられて、所せましと展示されており、死者の冥土への旅立ちに生前使用した食器・祭具・化粧用具・楽器などで殊に大きな琴・笛・笙等珍しい。全部で約三千点程ある。また、殉死の替わりに入れたのか木俑という木彫の人形が多数と冥銭という贋金もあり、あの世の沙汰も金次第と云うわけか。二千年以上も経過したとは思えぬ布地が立派な絹・綿・麻・で模様は今もなおあざやかである。漆器の壺等は色彩も光沢も現在の物の様に見える。副葬品の展示の見学を終り、地階に案内される。

其処には生々しい「軑侯夫人」の遺体あり。約二千年前の人物との体面である。長い間土中に埋められていた。綿や絹・麻の布二十枚で蔽われて、直接の遺体は地下二階に安置され、ガラス越しに見下ろす形で見られる窓は二つあり、遺体は解剖後、とり出した内臓と別々に見る様になっていた。薄い絹布に覆われた遺体は、寝ている通りに見える。掘り出した時には肉体も弾力があったと言われる。身長154㎝・体重34.3kg生前50kg位・血液型Ａ型・50歳位・胃・腸・食道から「まくわうり」の種子が138個発見された、夏に急死されたと思われる。次は別館に案内された。

ここは巨大な直方形体の棺が３個置かれていた。一番大が高さ2.63ｍ・長さ6.7ｍ・幅4.85ｍもあり、軑侯夫人の棺で説明によれば厚さ40㎝もある板で１ｔ以上のもあって、70枚が釘を使わず組立てられ、一分の隙間もなく接合されていて、二千年過ぎた今でも用材として使える位に見えた。盗掘で腐った棺の材木も隣に積上げ保管されてあり、二千年も保った棺の保管法の説明によれば、深さ16ｍ掘り下げ、棺の廻りに５ｔの木炭で埋め、上を１ｍ～１ｍ50㎝の厚さ

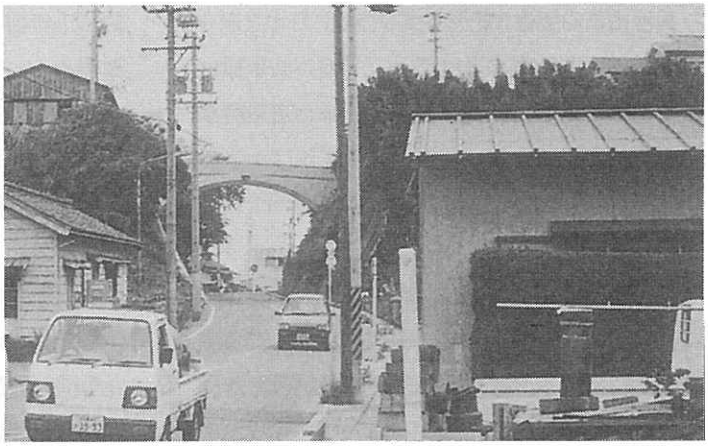
に白膏泥という特殊な陶土で外部の空気を遮断し、木炭が水分を取り、遺体の皮下脂肪も腐敗から守られた。上に４ｍの盛土がされていた。中国の文化を偲ぶのには充分な遺構が此処のあちらこちらに見られる。

そんな思いをはせながら楽しい中国の思い出を味わいつつ、博物館の見学を終えて次の予定地「貴陽」に行くべく駅へ向かった。列車は北京発昆明行11時15分長沙駅着、通訳が車内の客席迄案内して下さる。感謝の言葉を述べて別れた。

かつての“いちき橋”界隈（二）

渡　邉　榮　造

夜来の身を切るように冷たい暴風がばったり凪いだ翌朝、一面に真っ白な雪が積もっていると、悪童共はツララ採りや、雪だるま作りに登校前暫し駈け回ることになる。それにしても雪の朝、いちき橋の上から眺めた雪景色の素晴らしさはまた、格別だった。



すっかり暖かくなって橋の東南の山の上に見える“藤塚”の桜が、遠目にもピンクを帯びてくると愈々春だ。藤塚は10数本の桜の木に囲まれた小さな祠で、何が祀られているのか知らなかった。しかし草が芒々と生い茂る中に鳥居があり、小さな土まんじゅうの前に錆びた一尺程の小さなブリキの鳥居が２・３本立っているのは何となく不気味で、夏に桜の木へ集まる蝉を獲りに行く以外は、滅多に近付く子供はいなかった。

その桜が満開になると、愈々常滑祭が来る。授業時間の繰上げで、学校から早く帰った悪童共は、目の色を変えて“六衛の坂”（別名会所の坂）を跳ぶようにして往還にあるお祭小屋（山車の車庫）へ駈けつける。

白山下（現常滑高校西）で六台の山車が勢揃いして、、招魂祭を済まし、北条の山車を先頭に、新道を北へ向っていちき橋の下へ差しかかる頃には、いちき橋の上は黒山の人だかりで、最高の観覧席になっていた。

今年も悪童共には、この上なく嬉しい夏休みが来た。子供達は家の手伝いの合間をみては、北条の海岸へ泳ぎに行ったり、田面（とうも）へ蝉やギス（きりぎりす）を掴まえに走ったり、トンボを“かえし”（とんぼ釣り）に懸命だった。しかしトンボをかえすには囮のトンボが必要なため、悪童共は夕方になると釣竿を持っていちき橋へ集まる。

トンボは何故か夏の陽が西へ沈みかけると北から南へ一斉に跳んで行く習性があるようで、それを橋の上で待ち伏せして釣竿で叩き落とすという算段である。しかしトンボも中々利口で、人の姿や長い竹竿を見ると急に高度を上げて逃げてしまうので、子供達は橋の欄干から首だけ

出してトンボの近付くのを待つわけだ。

若しうまく落したのがメット（雌）だったら、もう明くる日のトンボがえしは、手間要らずに面白い程ヤンマ（雄）がとび付いてくるという醍醐味が味わえるわけである。

尤も子供達は夕方になると釣ったトンボは「また来いよ」と言って必ず逃がしてやることを忘れなかった。然も旧盆前の13日になると、大人達に殺生したらお精霊様に叱られると聞かされ、お盆を境にこれらの昆虫を獲りに行く者はいなかった。

秋も深まると藤塚の上に昇ってくる秋の月は金色に輝き、とても大きく素晴らしい眺めだった。私は幼い頃、この月が欲しくなって大人なら藤塚まで行けば手が届くと思い、姉の背中で取りに行こうとせがんで、思いきりお尻をつねられたことがあった。ともあれ、いつまでも私の網膜に美しい姿を残していてくれている藤塚の月でもある。

恰度そんな頃、北条の往還にカフェーが店を開いた、何でもハヤシライスとかカレーライスという西洋料理を食べさせてくれて、綺麗な女給のサービスでビールや酒も飲めるし、芸者遊びより安上がりで面白いらしい。

〽女給商売さらりとやめて
　　可愛い坊やと二人で暮す
　　抱いて寝かせて母さんらしく
　　せめてひと夜の子守唄

蓄音機が奏でるこんなメロデーが、カフェーの窓から流れてくるようになると、アメリカの金融恐慌（昭和４年.1929）のあおりをまともに受けての、酷い不景気も暫し忘れ、これまでの娘遊びもやめて、いちき橋界隈の若い衆は、しばしばカフェーへ通うことになる。

男達がハイライやライスカレーの味を覚えると家庭の主婦も負けてはならじと、家でも次第にハイカラな西洋料理になる物を調理するようになり、それに伴って今まで殆ど見向きもしなかったソースもだんだん一般化してきた。いわば料理革命だったのかも知れない。

さて、北条の名士は何といっても滝田（英二）がダン突で、北条の山も畑も溜池も、すべて滝田のものだと大人達に聞いていた。しかしいちき橋界隈にはひと味違った名士（迷氏）が居た。まず、いちき橋東の坂の中途に住む乭太郎（仮名）は隠亡稼業で、少し足が悪かったが至極元気な老人で、北条に死人がでた時は、無くてはならぬ存在だった。

その乭太郎の家に“赤ウニ馬一”（仮名）という人物が同居していた。彼は乭太郎の息子か養子か実名も知る人は無かった。その彼はまだ30代中ばと思えるのに、気の毒な知恵遅れで、悪童に大声で名前を呼ばれると、「はいっ赤ウニ馬一」と直立不動で答えるのが可笑しくもあり哀れでもあった。大人達の話によると、何でも若い頃受けた兵隊検査の時が頭を離れず、あんなになったという。

もう一人は、住いは何処か知らなかったが“てんきり”（仮名）という男がよくいちき橋へやって来た、彼の名前も全く分からなかったがテンカンの持病で白痴になったらしい、彼もおとなしい人物だったが、一度どうしたはずみかいちき橋から落ちたことがあった。可哀そうにてっきり死んだと思っていたら、幸い急な斜面を辷(すべ)り落ちた為、スリ傷程度で済んだらしく、子供心にもホッとしたものである。

彼等はいずれも大変おとなしい人達だったし、悪童共も決して彼等をいじめることはなかった。これは“弱い者をいじめるな”という教育がよく浸透していた為だったようだ。それにしても、若し彼等が現在、少年だったら充分な医療と厚生施設でいろいろ保護を受けていたに違いない

と思うと、彼等の生れた時代が悪かったと言うしか仕様がないようだ。

ともあれ、若しいちき橋に心があれば、竣工してざっと75年、激動の時代を経てきてその間の数多い人間模様をどう思っているか聞きたいものである。（文中敬称略）

秋の研修旅行のお知らせ

平成６年８月30日

常滑市民俗資料館友の会
会長　片　山　忠　義

残暑お見舞い申し上げます。今年の夏は水不足で毎日の営みもさぞかし大変な事であろうとお察しいたしています。

さて、友の会の継続事業としての日本六古窯視察巡りは、昨年の信楽につづき今回は越前焼きを研修のテーマに据え、福井県立陶芸館の見学を始め窯元を尋ねて越前焼きの過去と現代について研鑽し、併せて山中の湯宿での宴をはさみ親睦の絆を深めたいと計画いたしました。帰路は九頭竜の渓谷とダムを眺めつつ、季節がら木曽の紅葉を満喫しながら帰れるように立案いたしました。

会員の皆様始め、新入会員の募集も含め多数の方々のご参加をご期待申し上げ、ご案内させて頂きます。

記

(1)日　時　平成６年11月10日(木)～11日(金)

(2)行　先　（旅行コース及び日程概略）

第１日　越前陶芸村・県立陶芸館、三国、滝谷寺、性海寺、山中温泉（泊）

第２日　永平寺、一乗谷朝倉遺跡、九頭竜湖、美濃関刃物店

(3)会　費　１人２０，０００円（記念写真が１枚付きます）

なお、申し込み以後ご自分の都合により参加出来なくなった時は、代わりの方の参加をお願いします。

また、平成６年度会費未納の方は、２，０００円を同時にお納め下さい。

(4)申込み　10月16日(日)迄に会費を添えて、事務局にお申込み下さい。先着順に受付け、定員になり次第締切らせて頂きます。

(5)募集人員　50名（定員60人乗りバスで補助椅子を使用せずにゆったりと）

(6)旅行の成立　参加申込が40名未満のときは中止致します。

(7)会費の返還　都合で参加出来なくなった方は速やかに事務局へご連絡下さい。

10月30日迄にお申出の方には全額をお返ししますが、それ以後の方はお返しできませんので、ご承知下さい。

第16号、平成６年（1994）９月25日発行、発行所　常滑市民俗資料館友の会、常滑市瀬木町４-２０３
電話〈０５６９〉３４-５２９０　編集担当者　中野健三　印刷　株式会社　好文